

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	訪問看護における観察を学ぶための学内演習室の整備：高齢者とその家族の日常生活の再現を目指して
別タイトル	Preparing a school training room for learning observation in a home visit nursing setting : Aiming to recreate the day to day life of an older person and her family
作成者（著者）	島村, 敦子 / 菅谷, 綾子 / 鈴木, 裕子 / 植田, 満美子, / 鳥田, 美紀代 / 上地, 賢 / 佐瀬, 真粧美 / 美ノ谷, 新子
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2020.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 3. p.43 52.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	報告
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD39958952

訪問看護における観察を学ぶための学内演習室の整備

—高齢者とその家族の日常生活の再現を目指して—

島村 敦子 菅谷 綾子 鈴木 裕子 植田 満美子
鳥田 美紀代 上地 賢 佐瀬 真粧美 美ノ谷 新子

本稿では、訪問看護における観察の学修を促す環境として、高齢者とその家族の生活の再現を目指した演習室を整備したので報告する。設定した療養者と家族の背景は、80歳代の一人暮らしの女性、要介護2、循環器系疾患(慢性心不全と高血圧)、軽度認知症あり、通所介護、訪問介護を利用中、家族は通いで介護中とした。また、文献検討および教科書の観察項目、関連する専門領域の教員による会議より、演習室の観察内容として、「全体的な雰囲気」「人生背景」「他者からの生活への関与」「内服管理」「食事」「排泄」「活動」「清潔」「身だしなみ」「家族背景」「見当識を補う工夫」「緊急時の連絡方法」の12項目を導き、視覚的に観察可能な物品を演習室に配置した。演習室は、観察者の観察力とアセスメント力の育成に役立つ可能性があると考えられた。今後は、観察者の観察内容、アセスメント内容を明らかにし、本演習室の有効性を検証することが課題である。

キーワード 日常生活 訪問看護 観察 高齢者 演習室

1. 序文

在宅看護論は、1996年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正により新設された。さらに、2009年のカリキュラム改定により、統合分野に位置づけられ、地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、在宅での看護実践の基礎を学ぶ内容とすること(厚生労働省, 2007)が明示された。そして、訪問看護は、在宅看護を行う一つ的手段として、在宅看護論の中で学ぶことになる。訪問看護において、もっとも基本となるものは観察であり、このベースが確定しない限り、特に学習途上にある学生にとって看護の正しい方向付けや看護計画は立案されがたい(豊田, 2005)と言われている。すなわち、看護基礎教育において、訪問看護における観察を学ぶ必要がある。

現在、学生が訪問看護における観察を学ぶ方法には、教科書や書籍、DVD教材等がある。これらの教材では、訪問看護の観察項目として、療養者の全身状態の系統的なアセスメント項目に加え、療養環境やこれまでの生活習慣、介護状況、他職種等による援助などが挙げられている。さらに、DVD教材では、退院前カンファレンス場面、初回訪問場面など、訪問場面ごとに重要な観察ポイントが示されたものもある。学生は、これらの既存の学習教材を用いて訪問看

護の観察項目を学ぶことができる。

加えて、前述したような項目の観察は、訪問看護では、療養者の生活の場において行われる特徴がある。療養者とその家族が生活する場は、療養者がそれまで家族とともに暮らしてきた年月が積み重ねられ、調度品1つひとつにも彼らの考え方や価値観、独自の歴史が刻まれている場所である(伊藤, 2013)。また、先行研究によると、訪問看護師は療養生活の場の空気も感じ取り、その日に必要な看護を提供する(Shimamura, Suwa,&Tsujimura, 2016)とされている。これらのことから、学生が訪問看護における観察を学ぶためには、既存の学習教材により観察項目を学ぶだけではなく、実際に療養者と家族の自宅に訪問した環境において、観察の技術を学ぶことが重要になる。

看護基礎教育において、療養者とその家族が生活する自宅へ訪問する機会は、在宅看護に関する実習にて得ることができる。在宅看護実習において、学生の実施した看護ケアで最も多いものは、症状の観察76.62%(竹口, 中尾, 山谷, &稗圃, 2014)との報告がある。また、訪問看護ステーションの実習指導者が考える実習前に修得すべき看護技術として「室内環境の観察」(鳥田, 丸岡, &樋口, 2016)が挙げられている。

これらの先行研究の結果からも、在宅看護実

習前に看護基礎教育機関内において、実際の療養者と家族の生活環境に類似した場での観察を学修することは、学生の観察する力を伸ばすために有効であり、そのための演習室の整備が必要であると考えた。

さらに、看護基礎教育検討会（厚生労働省, 2019）では、看護基礎教育における現状と課題として、在宅医療や地域包括ケアシステム構築が推進しているため、看護職員には地域に暮らす療養する人々を生活者として捉え、看護サービスを提供する役割が一層求められていることが指摘されている。以上から、療養者と家族が生活する日常生活に焦点を当て、その生活環境を観察できる演習室を、看護基礎教育機関内に整備することは重要であると考えた。

しかし、医学中央雑誌（web版）を用いて「演習室」をキーワードとし、1997年から2019年までの文献を検索したが、看護基礎教育機関内において、訪問看護の観察を学ぶための演習室や高齢者と家族の日常生活の再現を目指した演習室の整備に関連する文献は存在しなかった。そこで、訪問看護における観察の学修を促す環境として、高齢者とその家族の生活の再現を目指した演習室を整備したことを報告したいと考えた。すなわち、本報告は、今後、看護基礎教育機関内において、訪問看護の観察を学ぶための日常生活に焦点を当てた演習室をどのように整備するのかを示す基礎的資料として位置づけられると考える。

II. 方法

1990年の日本看護協会訪問看護検討委員会による訪問看護の定義には、「訪問看護従事者によって、健康を阻害する因子を日常生活から見出し、健康の保持・増進・回復をはかり、あるいは疾病や傷害による影響を最小限にとどめる（後略）」（上野, 2013）ことが含まれる。すなわち、整備する学内演習室は、対象者の生活背景を捉えることのできる空間であり、療養生活を送る上で、生活習慣に基づく危険性など疾病に関連した日常生活の状況が表現される必要が

ある。さらに、自宅で生活する療養者への看護過程を展開するために必要な情報をアセスメントできる要素を配置する必要がある。そこで、はじめに療養者とその家族の背景を設定し、その背景に合わせた日常生活の状況が表現されることを目指した。以下に検討の過程を説明する。

1. 療養者とその家族の背景に関する検討

一般的な訪問看護利用者の背景の設定を検討するために、厚生労働省の調査を用いることとした。具体的には、訪問看護利用者について、最も利用頻度の高い年代、性別、疾患、認知症の程度、要介護度、サービス利用状況を療養者の背景とした。次に、導き出した年代、性別の療養者を介護している割合の高い家族背景を設定した。

2. 日常生活の状況に関する検討

文献検討および、複数名の教員による会議を経て決定した。以下に説明する。

1) 文献検討

データベースは、医学中央雑誌（web版）を用いた。訪問看護師は自宅訪問時に何を観察しているのかを明らかにするために、キーワードを「訪問看護」「観察」とし、2013年から2018年の5年間の文献を検索した。訪問看護師の観察内容に関する記載があるか、という視点から抄録を目視検索した後、対象となる文献を決定した。

対象文献について、訪問看護師の自宅訪問時の観察内容を抜き出した。さらに、在宅看護に関する教科書を概観し、療養者、家族、生活環境の観察項目に加えて、具体的な観察内容と理由が詳細に説明されている教科書を2冊（石垣 & 上野, 2019；正野&本田, 2014）選定した。そして、選定した教科書に記載されている観察項目と照合した。最終的に、文献検討の内容と教科書の観察項目から、演習室における観察内容を導き出した。

2) 複数名の教員による会議の開催

訪問看護を専門とする教員だけではなく、自宅への訪問活動を伴う看護領域および、設定した療養者に関連する領域の教員による検討会議を開催することとした。会議では、療養者とその家族の背景、文献検討および教科書の観察項目より導き出された観察内容について、訪問看護の利用者およびその日常生活の状況が表現されているか、という視点から検討した。さらに、設定した療養者と家族の背景をもとに、訪問看護で行われる内容を想定し、必要な観察内容を追加した。また、観察内容に関して、視覚的に表現するための必要物品について検討を行い、演習室に配置する物品や配置場所について決定した。

Ⅲ. 結果

1. 療養者とその家族の背景の設定

厚生労働省による介護サービス施設・事業所調査(厚生労働省, 2016b)によると、訪問看護ステーションの利用者は、介護保険法70.4%であり、健康保険法の29.6%より高い。介護保険法による利用者では、「80～89歳」が43.7%と最も多い。また、性別では「男」39.8%、「女」60.2%であり、女性が多い。傷病別の内訳では、循環器系疾患が26.2%と最も高い。要介護度では要介護2が25.2%と最も多い。また、認知症の状況は、「認知症あり」は、加齢とともに増えており、「80～89歳」では「認知症あり(ランクⅡ以下)」が59.2%を占める。要介護2の訪問看護サービス以外の介護サービス利用状況(厚生労働省, 2016a)では、通所リハビリテーション32.7%、通所介護30.6%、訪問介護28.8%であり、これらの利用率が高い。以上より、療養者は、80歳代の女性、要介護2であり、循環器系疾患(慢性心不全と高血圧)、軽度認知症あり、通所介護、訪問介護を利用中とした。

家族の背景として、「80～89歳」代の訪問看護利用者の家族は、「子と同居している世帯」が多い。しかし、我が国では、一人暮らし高齢者が増加傾向にある(内閣府, 2017)。そのた

め、「家族は、一人暮らし高齢者を通いで介護している」設定とした。

2. 日常生活の状況の設定

1) 文献検討

文献検討の結果、56文献が抽出され、目視検索の結果、最終的に15文献を分析対象文献とした。このとき、前述の検討を通して、療養者の背景は高齢者に設定されたため、小児の訪問看護に関連する文献は除いた。

15文献について、「訪問看護師は自宅訪問時、何を観察しているのか」という視点から関連する部分を要約して抜き出し、在宅看護に関する教科書にある観察項目と照合し、演習室における観察内容とした。その結果、「全体的な雰囲気」「人生背景」「他者からの生活への関与」「内服管理」「食事」「排泄」「活動」「清潔」の8つの観察内容にまとめられた。表1に示す。

表1 文献検討から導いた演習室における観察内容

観 察 内 容	文献からの要約
全 体 的 な 雰 囲 気	家全体の雰囲気のみる 室内環境の観察をする
人 生 背 景	療養者の人生背景を把握しそのまま受け止める 療養者の好み、趣味を把握する
他 者 からの 生 活 への 関 与	療養者が生きてきた過程で大切にしていたことを知りかかわりの糸口にする 療養者の状態を正確に把握するために家族・他職種から情報を得る(連携ノート等) 看護職から情報を得る
内 服 管 理	他人の目を借りて病状変化の兆候を見落としていないかチェックする 薬が本当に飲んでいるかを確認する 内服がしっかりとできているかを観察する 服薬管理の状況を確認する
食 事	食事の状況のみる
排 泄	排泄の状況のみる 自然排尿・排便の観察をする
活 動	ADLの観察をし、評価する 移動の状況を観察する
清 潔	睡眠状況をおおまかにみる 清潔(陰部洗浄・オムツ交換など)の状況を観察する

2) 複数名の教員による会議

自宅への訪問活動を伴う看護領域として、在宅看護論、公衆衛生看護学を担当する教員とした。また、療養者の背景が高齢者となったため、老年看護学を担当する教員を含めることとし、ひとつの看護基礎教育機関内に所属する教員合計8名にて会議を開催した。なお、2-3名による検討会議は5回、各30分程度行い、8名による全体会議は1回、90分程度行った。

(1) 観察内容の検討

設定した療養者と家族の背景と照らし合わせた結果、表1に示した8つの観察内容に加えて、「身だしなみ」「家族背景」「見当識を補う工夫」「緊急時の連絡方法」の4項目を追加した。追加した主な理由を以下に説明する。

①「身だしなみ」について

高齢者にとって清潔にするということは、体の新陳代謝や血液循環を促進させ、細菌感染を予防するだけではなく、精神的にも爽快となり、人との交流や社会的なつながりを広げることに影響する(堀内, 大淵&諏訪, 2018)と言われている。すなわち、「清潔」の中には、身体を清潔に保つことだけではなく、高齢者の自分らしさを表現することや高齢者の尊厳に関連するもの、すなわち「身だしなみ」に関連するものも含まれている、という意見が挙げられた。そこで、「清潔」の項目とは区別し、「身だしなみ」の項目を挙げ、追加することとした。

②「家族背景」について

会議では、「人生背景」の中に、「家族背景」も含まれるとの意見もあった。しかし、家族も訪問看護の対象者であり、家族のアセスメントも行う。そのため、療養者の人生の背景の一部として表現するのではなく、観察内容として項目を挙げることにした。また、一人暮らし高齢者の設定であるため、家族とのつながりがわかりにくい可能性がある。一人暮らしであっても、家族とのつながりがあることを、明確に表現する必要があることが挙げられた。

③「見当識を補う工夫」について

介護保険制度に基づく訪問看護サービス利用

者では、認知症なしの割合は18.5%(厚生労働省, 2016b)であり、認知症を有する高齢者の割合は高い。訪問看護サービス利用者に関わらず、我が国において、2018(平成30)年には認知症の人の数は500万人を超え、65歳以上高齢者の約7人に1人が認知症と見込まれる(認知症施策推進関係閣僚会議, 2019)といわれている。このような背景から、認知症を有する高齢者の生活を学ぶ環境が必要であるという意見が出された。認知症の主要な症状には、認知機能の低下がある。認知機能が低下することに伴う見当識障害に関連する観察項目が必要であると考え、追加することとした。

④「緊急時の連絡方法」について

会議では、「他者からの生活への関与」に関連して、高齢者は他者とどのように連絡を取るのか、という意見が挙げられた。療養者とその家族の背景の検討より、療養者は基本的には、一人暮らしであるが、「通いで介護している家族」との連絡方法を考える必要がある。また、訪問看護サービスでは、定期的な訪問看護に加え、緊急時に電話を用いて24時間連絡できる体制がある。そのため、高齢者が外部に連絡する方法を設定する必要があると考え、追加することとした。

(2) 視覚的に観察可能な物品の検討

文献検討および複数名の教員による会議から導き出された12の観察内容; 「全体的な雰囲気」「人生背景」「他者からの生活への関与」「内服管理」「食事」「排泄」「活動」「清潔」「身だしなみ」「家族背景」「見当識を補う工夫」「緊急時の連絡方法」について、視覚的に観察できるものとして、演習室に配置する物品を検討した。配置する物品の選定においては、設定した療養者および家族の背景、すなわち「80歳代の一人暮らしの女性、要介護2、循環器系疾患(慢性心不全と高血圧)、軽度認知症あり、通所介護、訪問介護を利用している療養者と、通いで介護をしている家族」の生活が表現できることを目指した。表2には、観察内容に対する視覚的に観察可能な主な物品を示

す。なお、配置する物品は、高齢者の日常生活を表現することを目的としているため、新品の購入は控えた。

表2 観察項目ごとの主な配置物品

観 察 内 容	主な配置物品
全 体 的 な 雰 囲 気	のれん・たんす・座布団・テーブル
人 生 背 景	趣味の折り紙・旅行の本・新聞
他 者 からの 生活への関与	訪問介護などのサービス担当者用のファイル・回覧板
内 服 管 理	内服カレンダー・薬袋・市販薬・湿布剤
食 事	お菓子・電子レンジ・炊飯器・お箸立て・ポット
排 泄	リハビリパンツ・尿取りパッド・乳酸飲料
活 動	玄関の段差・マット・スリッパ・つえ・延長コード
清 潔	着替え・掃除機・タオル
身 だ し な み	ストール・寝間着
家 族 背 景	家族の写真(ペット)・遺影
見 当 識 を 補 う 工 夫	時計・カレンダー
緊 急 時 の 連 絡 方 法	携帯電話

(3) 演習室の物品配置

整備した演習室は、引き戸を開けて演習室内に入ると、流し台を備えたフローリングスペースがあり、その奥に畳の和室が続いている。以下に、配置した物品について説明する。

①全体的な雰囲気について

引き戸を開けてから、和室の部屋までの仕切りを作り、80歳代の女性の一人暮らしであることから、やわらかい部屋の雰囲気を出すために、レースのカーテンを間仕切りとして設置し



図1. 療養者の居室から見える全体的な居室の雰囲気

た。

②人生背景

折り紙、旅行の本、新聞を和室のテーブルの上に配置することで、療養者の趣味や今後の生活の希望を表現することを目指した。

③他者からの生活への関与

療養者は、通所介護、訪問介護、訪問看護を利用している設定である。多職種間の連携を観察できるものとして、サービス担当者間で情報を共有するためのファイルを設置した。また、療養者が近隣住民から情報を得ていることなど、情報のやりとりを表現するために、療養者が座る位置から見える場所に回覧板を配置した。

④内服管理

療養者は、慢性心不全と高血圧を有する高齢者としている。これらに関連する内服薬の管理状況を示す目的で、お薬カレンダーを設置した。



図2. 主に内服管理、他者とのつながり、家族背景を観察できる場所

⑤食事

一人暮らし高齢者であり、流し台において、ガスコンロは使用せず、炊飯器、電子レンジを用いて調理していることを表現した。さらに、お菓子やごみ箱の中にお菓子のゴミを入れることで、食習慣を観察できることを目指した。



図3. 食事準備の状況を観察できる台所

⑥排泄

療養者の排泄状況を観察するきっかけになるものとして、排尿に関してはリハビリパンツ、尿取りパッド、排便に関しては乳酸飲料を配置した。これらの物品から、高齢者が持つ排尿の困りごとや排便習慣への工夫を表現することを目指した。

⑦活動

活動について、療養者の移動の状況を観察するために、玄関の段差、スリッパ、杖が見えるように配置した。また、使い勝手を良くするために療養者が行っている工夫としてテーブルの上にポットを置き、一方で、配線のための延長コードを設置して室内の移動の際に注意が必要な配置とした。



図4. 玄関から見える居室

⑧清潔

演習室の中に、入浴状況などの清潔に関連する視覚的に観察可能な物品を配置することはできなかった。そのため、室内の清潔を保つための方法の一つとして、掃除機を配置した。

⑨身だしなみ

着替えの状況を観察するために、寝間着、ストールを療養者の座るスペースに配置した。

⑩家族背景

療養者は、一人暮らしの女性であるが、通いで介護をする家族（子）がいる設定である。そのため、配偶者は他界したこととし、遺影を置いた。また、学内の演習室では、実際のペットを飼育することは困難であるため、ペットの写真飾った。

⑪見当識を補う工夫

その日の日付、時間がわかることは日常生活において当然のことではある。しかし、認知機能の低下した高齢者においては、見当識の低下が生活に及ぼしている影響や見当識の低下を補うための工夫について考え、生活状況を観察する必要がある。そこで、時間の見当識を補うための時計、日付の見当識を補うためのカレンダーを設置した。また、カレンダーには利用しているサービスの予定を記入した。

⑫緊急時の連絡方法

外部との連絡手段の一つとして、テーブル上に携帯電話を配置した。

以上の物品を配置した演習室は図1-4に示した。

IV. 考察

本報告では、特定の疾患や急変時など療養者の身体状況の設定および、病棟や施設の一室の生活環境とは異なり、個別性のある療養者の住環境を表現することを目指した。整備した演習室について、訪問看護における観察を学修する環境として、どのような特徴を備えているのかを考察する。

整備した演習室には、学生が観察すべき項目を、視覚的に観察可能な物品として配置した。

これらの物品を学生が観察すべき内容として観察するためには、その内容に注意を向ける必要がある。ひとが注意を向けるとき、知識や経験、期待や意図などの主体の内側の要因で生じる内的注意、すなわちトップダウン型注意と、明るさや大きさなど刺激そのものがどれほど目立つか(顕著性)という刺激側の属性に基づいて、主体の外側の原因によって生じる外的注意、すなわち、ボトムアップ型注意の2つの種類が存在すると考えられている(松吉, 2013)。そのため、訪問看護において観察すべき項目を、視覚的に観察可能な物品として配置した本演習室では、学生に対して事前に療養者と家族の背景を提示し、学生の知識や経験などの準備状況に合わせて観察目的を提示することで、学習者である学生のトップダウン型注意による観察を可能にすると考える。しかし、患者と付き添い者がいる病室の観察において、看護学生は観察の焦点が定まっていないこと(河合, 2000)が明らかになっており、学生は、トップダウン型注意による観察だけは、観察の焦点が定まらない可能性がある。この点について、先行研究では、視覚的な観察を要する課題では、ボトムアップ型注意とトップダウン型注意は相互に影響を受ける(小川, 2007)と言われている。以上より、学生のトップダウン型注意による観察だけではなく、ボトムアップ型注意の両者の側面から学生の注意を促す環境であるかを考える必要がある。

そこで、ボトムアップ型注意の視点から本演習室を考えたい。整備した演習室は、日常生活の再現を目指しており、現実生活に即さない物品は存在しない。そのため、ボトムアップ型注意を促すことは難しい環境であることが予想される。一方で、点滴、酸素・吸引、ティッシュ・ゴミ箱などのある病室の観察において、学生は、日常生活にあるティッシュ・ゴミ箱よりも、点滴領域、酸素・吸引領域を優先し観察している(光木ら, 2018)との報告がある。この先行研究を踏まえると、本演習室に配置した、医療的ケアに関連する「薬カレンダー」は、トップ

ダウン型注意とボトムアップ型注意の両方からの注意により観察される可能性があると考えられる。また、薬カレンダーに残っている残薬を不揃いとするなど、薬カレンダーが目立つ工夫を加えることで、さらにボトムアップ型注意を促すことができるだろう。

また、本演習室では「排泄」の観察内容として、排泄行動に直接関連するトイレ環境ではなく、排泄習慣に関連すると考えられる乳酸飲料や、尿漏れなどの排尿時の困りごとに関連すると考えられる尿取りパッドを配置した。20歳代の若者に比べ、高齢者では、排便・排尿に関する有訴者率は上昇している(厚生労働省, 2013)。このことは、20歳代である学生にとって、「尿取りパッド」の存在は、学生自身の生活には馴染まないものとして、ボトムアップ型注意を促し、「尿取りパッドがある」という観察はできる可能性がある。加えて、看護学生と訪問看護師の情報収集を比較した研究(吉岡, 2005)では、看護学生は項目に沿って情報収集をしているが、訪問看護師はケアの具体的な内容まで考えており、情報収集の内容が異なることが明らかになっている。すなわち、学生は、「排泄」に関連した尿取りパッドについて、「尿取りパッドがある」という観察にとどまる可能性がある。この時に、学生が高齢者の習慣や悩み事と関連づけ、訪問看護師のケアの具体的な内容まで考えるよう導くことが、アセスメント力の向上につながると考える。このように、配置した物品の工夫や学生の思考を促すことで、学生が療養者と家族の背景に基づいて演習室にある物品を観察し、療養者と家族の日常生活をアセスメントする力を育成することも可能になると考えられる。

また、在宅ケアに関わる訪問看護師、訪問リハビリ職、訪問介護職、訪問栄養士は、共通して日常生活を観察しているが、訪問栄養士は食生活、訪問介護職は環境の変化、訪問看護師は療養者を生活者として家族を含めて観察するなど、職種間の違いがある(蒔田, 楠本, 永井, & 山根, 2018)ことが明らかになっている。整備した

演習室は、特定の疾患や急変時など療養者の身体状況を観察することに主眼を置くものではなく、高齢者の日常生活場면을再現することを目指した。この点について、学生の学修や訪問看護場面に限らず、訪問活動を伴う専門職が、自宅で生活する療養者の日常生活の観察を学ぶための演習室として活用できる可能性がある。

現時点では、実際の学生の観察内容、アセスメント内容、さらに訪問活動を伴う専門職の観察内容は明らかになっていない。今後は、整備した演習室を用いて、学生の学びや専門職の観察の視点への影響を明らかにし、本演習室の有効性を検証していくことが必要である。

V. 結論

本報告では、訪問看護における観察の学修を促す環境として、高齢者とその家族の生活の再現を目指した演習室の整備について報告した。演習室の整備にあたっては、療養者とその家族の背景を設定した後、文献検討、教員による会議を経て、演習室に配置する物品を決定した。療養者の背景は、厚生労働省の調査に基づき、訪問看護利用者の最も多くを占める者とし、80歳代の女性、要介護2であり、循環器系疾患（慢性心不全と高血圧）、軽度認知症あり、通所介護、訪問介護を利用中とした。さらに、一人暮らし高齢者が増加傾向であることを踏まえ、家族は通いでの介護とした。観察内容は、「全体的な雰囲気」「人生背景」「他者からの生活への関与」「内服管理」「食事」「排泄」「活動」「清潔」「身だしなみ」「家族背景」「見当識を補う工夫」「緊急時の連絡方法」の12項目を設定し、視覚的に表現可能な物品を演習室に配置した。整備した演習室は、学生が療養者と家族の背景に基づいて演習室にある物品を観察し、療養者と家族の日常生活をアセスメントする力を育成できる可能性があると考えられた。しかし、本演習室を用いた学生や訪問看護活動を伴う専門職の観察内容、アセスメント内容は明らかではない。今後は、学生や専門職の観察内容、アセスメント内容を明らかにし、本

演習室の有効性を検証することが課題である。

VI. 利益相反

本報告における利益相反は存在しない。

引用文献

- 堀内ふき，大淵律子，諏訪さゆり（2018）：
ナーシング・グラフィカ老年看護学②高齢者
看護の実践．第4版，メディカ出版。
- 石垣和子，上野まり（2019）：在宅看護論：自分ら
しい生活の継続をめざして．第2版，南江堂。
- 伊藤隆子（2013）：第三章 わが国の地域社会・
家族の特徴と在宅看護 4．生活の場での療
養者の理解と援助関係形成 A．在宅という
療養者の生活の場の特徴．在宅看護論 自分
らしい生活の継続をめざして．47，南江堂。
- 河合千恵子（2000）：看護教育における患者観
察力習得の重要性．久留米医学会雑誌，63（8
- 11），201-210。
- 厚生労働省（2007）：看護基礎教育の充実に関
する検討会報告書．Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>（検索日2020年2月18日）
- 厚生労働省（2013）：平成25年国民生活基礎
調査．Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/dl/16.pdf>（検索日2020年2月18日）
- 厚生労働省（2016a）：平成28年介護サービス施
設・事業所調査 2居宅サービス事業所等の状
況．Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service16/dl/kekka-gaiyou_02.pdf（検索日2020年2月18日）
- 厚生労働省（2016b）：平成28年介護サービス施
設・事業所調査 3訪問看護ステーションの利
用者の状．Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service16/dl/kekka-gaiyou_03.pdf（検索日2020年2月18日）
- 厚生労働省（2019）：看護基礎教育検討会報
告書．Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（検
索日2020年2月22日）

- 蒔田寛子, 楠本泰士, 永井邦芳, 山根友絵 (2018) : 在宅ケアにおける専門職の観察の視点 訪問看護師、訪問リハビリ職、訪問介護職、訪問栄養士の職種の違いから. 豊橋創造大学紀要(22), 19-34.
- 松吉大輔 (2013) : 5複数の注意と意識、脳. 注意をコントロールする脳 神経注意学からみた情報の 選択と統合. 芋阪直行編, 新曜社, 122.
- 光木幸子, 當目雅代, 天野功士, 小笠美春, 田村沙織, 野々口陽子, 葉山有香(2018) : 看護学生が臨床場をを観察する時のアセスメント力を視覚情報から可視化する試み. 同志社看護, 3, 11-20.
- 内閣府(2017) : 平成29年版高齢社会白書. Retrieved from https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_2_1.html (検索日2020年2月18日)
- 認知症施策推進関係閣僚会議(2019) : 認知症施策推進大綱. Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf> (検索日2020年2月18日)
- 小川正(2007) : サル大脳皮質におけるボトムアップ型注意とトップダウン型注意の神経メカニズム. VISION.19(2),97-106.
- 島田昇, 丸岡紀子, 樋口キエ子(2016) : 在宅看護学実習における学習内容の実態. 群馬医療福祉大学紀要(4), 95-103.
- Shimamura, A., Suwa, S., & Tsujimura, M. (2016) : Sensing kuuki among visiting nurses. *International Journal of Nursing Practice*, 22(Suppl.1), 31-37. doi:10.1111/ijn.12437
- 正野逸子, 本田彰子(2014) : 関連図で理解する在宅看護過程. メヂカルフレンド社.
- 竹口和江, 中尾八重子, 山谷麻由美, 稗圃砂千子 (2014) : 在宅看護論実習の現状と課題 統合分野の観点から. 長崎県立大学看護栄養学部紀要, 12, 71-78.
- 豊田澄子(2005) : 訪問看護における観察 その基本姿勢について. *International Nursing Care Research*, 4(2), 13-18.
- 上野まり(2013) : 第 I 章 わが国の在宅看護成立への軌跡 3. 社会の変化と今日の在宅看護ニーズ B. 在宅看護サービスを提供する訪問看護師の役割. 在宅看護論 自分らしい生活の継続をめざして. 11, 南江堂.
- 吉岡敏子(2005) : 事例における看護学生と訪問看護師の情報収集の比較 必要な情報の理由とその情報から事例学習を考察. 群馬パース学園短期大学紀要, 7(1), 11-21.

Preparing a school training room for learning observation
in a home-visit nursing setting:
Aiming to recreate the day-to-day life of an older person and her family

Atsuko SHIMAMURA, Ayako SUGAYA, Yuko SUZUKI, Mamiko UEDA,
Mikiyo TORITA, Ken UECHI, Masami SASE, Shinko MINOTANI

Division of Community Health Nursing, Faculty of Health Science, Toho University

This report details of a training room to recreate the day-to-day life of a patient and her family to learn to observe home-visit nursing settings. The patient is a female in her 80s with cardiovascular disease (chronic heart failure and hypertension) and mild dementia who is utilizing day services and home-visit care. Her family visits her home to provide care. A literature review was conducted, points of observation in textbooks noted, and a meeting of teachers held to select the following 12 items comprising the observation contents in the training room: overall atmosphere, patient background, information from others, drug management, meals, toileting, activities, cleanliness, grooming, family background, ingenuity to support orientation, and emergency contact method. Additionally, items that can be visually observed were placed in the training room. The developed training room presented contents that should be observed during home-visit nursing for older persons. This training room could potentially help cultivate students' observational and assessment abilities. In the future, it is necessary to clarify the contents of observations and assessments by observers and to verify the effectiveness of this training room.

Key words day-to-day life、 home-visit nursing、 observation、 older people、 training room